

「現場主義」プロフェッショナルマガジン

# nursing

2002年4月20日発行(毎月1回20日発行)  
第22巻第4号(通巻273号)  
昭和56年6月22日第三種郵便認可  
ISSN 0389-8326

月刊ナーシング  
www.gakken.co.jp/nursing/

Vol.22 No.4  
2002

# 4



**とじこみ付録**

JCS・GCS・瞳孔スケール  
年齢早見表・瞳孔スケール

連続特集◎考える看護Ⅰ

## 見過ごしてはいけない!

**STOP & THINK...**

# 15のシーン

輸液・注射・検査・術後・不眠・移動・排泄・感染...



疑問解決に  
役立ち度No.1!

*nursing illustrated*  
看護技術のコツとワザ

### 左半身麻痺患者 ギプス装着患者の**移乗**

なるほど・なっとく 病態生理  
リンパのメカニズム  
**悪性リンパ腫**

こころのケアの現在  
**ナラティヴ・セラピー**  
いまを語るKeyword  
**それってセクハラ?**  
黒岩祐治の三つ星エッセイ  
**ナースにエール**  
米山公啓の近未来病院物語  
**未来ナース★白石未来**

新連載

新連載 がん性疼痛の看護

### モルヒネの理解と副作用対策

慢性腎不全の看護

保存期の看護ポイントとその実際

### 食事療法 生活指導 服薬指導

Gakken

## 第16回日本がん看護学会学術集会

### グローバルな視点で がん看護をとらえる

第16回日本がん看護学会学術集会(小島操子理事長)は、2月9・10日の両日、松山市にある愛媛県立県民文化会館において開催され、参加者は2000人を超えた。

今学会会長の松岡敏子氏(国立病院四国がんセンター看護部長)は、「がん看護にはより高い専門性ととも、患者の生き方を支え、その人なりの人生をサポートし、完成させるシステムが必要となる。そのためにはグローバルな視点でがん看護をとらえることが大切」だとして、メインテーマに「21世紀 グローバルながん看護の推進」を掲げた。

基調講演は佐藤禮子氏(千葉大学看護学部学部長)による『がん罹患者に対する外来がん看護の問題と将来展望』。「従来のがん看護は、入院での治療に重点がおかれていたが、昨今の医療財政の逼迫を受け、入院期間の短縮、外来医療・在宅医療

の整備充実がはかれるようになってきた。外来でがん看護に携わる看護職者に求められる条件は、①入院がん患者の看護経験をもっている、②一般的・専門的臨床看護能力が備わっている、③管理・教育・研究的能力を兼ね備えた看護職者であり、とくにマネジメント能力が必要とされてくる。明日の看護を拓いていくという一人ひとりの自覚が日々の看護を充実させ、その看護実践が現場に変化をもたらす」ことを強調した。さらに将来の展望として、アメリカでの専門看護師による外来での活躍にふれ、専門性を追究した外来看護が期待されていると述べた。

シンポジウムは『がん患者を多角的に支える』をテーマに、在宅医療を積極的に行っている立場から堂園晴彦氏(堂園メディカルハウス)、代替療法を実施する立場から手島恵氏(千葉大学看護学部看護実践研究指導センター)、患者・家族を精神的にサポートする立場から丸口ミサエ氏(国立がんセンター東病院)、患者の立場から前田勝氏(日本オストミー協会熊本支部)、病診連携システム推進の立場から谷水正人氏(国立病院四国がんセンター)が提言。

そのなかで、ホスピス機能を有する診療所を開院して以来、約400人(うち40%が在宅で最期を迎え、それは在宅を希望する患者の85%を占める)を看取ったという堂園氏は、「入院・外来・在宅を同一チームで行っているため、ケアする側も受ける側も精神的に安定している、患者・家族の心のケアに重点をおきグリーンケアにも力を注いでいる。将来はウィークリーマンションを診療所の近くにつくり、在宅希望の遠距離患者のためのセカンドハウス在宅ケアを実現したい」と語った。

丸口氏は、「精神的サポートとは患者・家族の気持ち・考えに添っていくことで、そのために大切なことは、①情報の提供、②話し合い、ともに考える、③側面からサポートする、④個人ではなくチームでかかわること」をあげた。

また、谷水氏は患者支援のためのインターネットのもつ可能性について述べ、「医療情報ネットワーク」やテレビ電話による医療の連携システムを紹介した。

パネルディスカッションのテーマは、「がん看護における認定看護師の波及効果」。認定看護師を教育する立場から足利幸乃氏(日本看護協会神戸研修センター)、受け入れる立場から山川文子氏(神奈川県立がんセンター)、勤務する立場から内海明美氏(東札幌病院)がそれぞれ現状報告と今後の課題を述べ、がん看護の質の保証における認定看護師の役割を明確にしていくこと、情報交換しながら個人としてもグループとしても力をつけていくことを確認し合った。

そのほか、特別講演は江口研二氏(国立病院四国がんセンター)による『がん医療における倫理』。また、『ホスピスケア認定看護師の活動』と題したワークショップも行われ、5人の認定看護師が緩和ケア病棟や在宅など、それぞれの立場から患者の自己決定を支援する取り組みを事例をとおして発表した。



メインテーマの設定背景を説明する本学会会長の松岡敏子氏



佐藤禮子氏による基調講演

一般演題は159演題(口述102演題, 示説57演題)が発表され, 新しい動きとして臨床試験に関する発表もみられた。

がん患者がその人らしく生きられるように, 外来を中心に地域と連携したサポートシステムの充実が求められている現在, がん看護の専門性を高めるべく, 認定看護師・専門看護師の育成が今後ますます望まれるであろう。

### キャリアアップをめざす人へ アドバンストセミナー開催

本学会に先がけて, がん看護においてキャリアアップをめざしている人を対象に, 今年度より3年間積み上げ方式による「日本がん看護学会アドバンストセミナー」が企画され, セミナー修了者に対して履修単位の認定を行い, 3年間継続して参加の場合には1単位, 1年のみの場合は1/3単位履修できることになった。

3年間のプログラムは, 専門基礎的内容の第1部と専門的内容の第2部の2部構成で, 第1部は「がん看護に活かすコミュニケーションスキル」が統一テーマ, こ

の分野の専門家の指導により, がん患者・家族と積極的にかかわりをもち, 相手を励ます態度・姿勢を効果的なコミュニケーションによって示すことをめざしている。第2部はそれぞれ「ペインマネジメント」「コンサルテーション」「がんサバイバーシップ」がテーマ。

その第1回日は, 2月8日16:00~20:00, エスポワール愛媛文教会館で行われた。

第1部は, 医療・福祉経営情報研究所 icon-plus社の村田小百合氏(チーフコンサルタント)を講師に迎え, 「患者から期待される対話と問題解決能力開発に向けて」に焦点をあてた2時間の講義を50人が受講した。受講者の経験年数は5~31年と幅が広く, 平均は13.3年であった。

ベクトルを顧客(患者)志向にすることが求められている現在, それをいち早くキャッチしている受講者に対する行動変容がねらい。求められる能力は, ①テクニカル(専門)スキル, ②対人関係能力,



シンポジウム。さまざまな立場からがん患者を支える5人のシンポジストが登場

③総合判断力で, とくに, ②における患者に対するコミュニケーション能力では, 相手の立場に立つことがポイントだとしながら, 行動心理学におけるPMP (Patient Management Program)を紹介。①自尊心を大切に, ②共感的に聞き反応する, ③協力を求め援助を与える, の3項目に沿ってどう行動すればいいかを具体的に解説した。講義のあとはナース役, 患者役, 観察者2人の4人一組となり, 事例を用いて実習を行った。

第2部は, 岡田美賀子氏(聖路加国際病院緩和ケア病棟)による「ナースに必要なペインマネジメント」, マネジメント困難な痛みに対するアセスメントとケアの実際を事例をもとに紹介, 痛みの種類に合わせた適切な薬物の選択とともに精神面へのケアの重要性を説き, 近隣のナースも加わって90人が受講した。

★

今回の日本がん看護学会は, 2003年2月8日(土)~10日(月), グランキューブ大阪(大阪国際会議場)において, 第17回日本がん看護学会学術集会(8・9日)と第1回国際学術集会(9・10日)の合同開催となる。また, アドバンストセミナーは2月9日に行われる予定。



アドバンストセミナー「がん看護に活かすコミュニケーションスキル」で村田小百合氏の示唆に富んだ講義に熱心に耳を傾ける受講者。実習にも熱が入る

